



田んぼ2030プロジェクト 田んぼだより

第1号 2022年10月14日発行

田んぼの生物・文化多様性2030(略称:田んぼ2030)ニュースレター
発行:NPO法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)水田部会
所在地:〒110-0016東京都台東区台東1-12-11青木ビル3F
TEL/FAX:03-3834-6566 電子メール:info@ramnet-j.org
ホームページ:http://www.ramnet-j.org



目次

田んぼだよりー田んぼ 2030 プロジェクトニュースレター 第1号発刊にむけて 水田部会長 金井 裕	1
NBSAP フォーラム「自然と共に～ネイチャーポジティブな農業を目指して 報告 安藤	1～2
田んぼのめぐみ いただきました 斎藤肇 / "めぐみ"の背景 NPO法人田んぼ 船橋玲二	2～3
むかい＊いきもの研究所の活動 向井 康夫	3
初めまして、田んぼの生きものたち 菅原暢子 / 水田部会からのお知らせ / 編集後記	4



田んぼだよりー田んぼ 2030 プロジェクトニュースレター 第1号発刊にむけて

水田部会長 金井 裕

2021年12月に小山市でキックオフ集会を開催した田んぼの生物・文化多様性2030年プロジェクト(田んぼ2030プロジェクト: <https://tambo10.org>)のニュースレターの第1号をお届けします。田んぼ2030プロジェクトは、2021年に区切りを迎えた田んぼの生物多様性向上10年プロジェクトを引き継ぎ、生物多様性保全の2030年目標に向けて新たに開始したものです。ラムサール条約・生物多様性条約の水田決議を基盤として進めることはこれまでと変わりませんが、地域の社会や生活、文化と生きものとの関わりへより一層目を向けて行くことにします。

ニュースレターも田んぼ10年だよりからタイトルやロゴなど紙面

を一新しました。「田んぼだより」では、田んぼの生物多様性保全にかかわるラムサール条約や生物多様性条約などの国際的な動きから、生物多様性国家戦略や農業政策など政府の施策、そして国内各地の参加者の活動についてのニュースや情報をお届けします。また、田んぼ2030プロジェクトに参加されている方々には発信の場としても活用していただきたいと考えています。ニュースレターへのご要望、ご意見があれば、ラムサール・ネットワーク日本事務局までお寄せください。



NBSAP フォーラム「自然と共に～ネイチャーポジティブな農業を目指して

安藤よしの

田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクトは、2022年4月20日、国際自然保護連合日本委員会(IUCN-J)の「生物多様性国家戦略を考えるフォーラム2022」の一環として、「自然とともに～ネイチャーポジティブな農業への変革をめざして」を、オンラインで開催しました。参加者は約80名でした。

道家哲平さん(国際自然保護連合日本委員会)によるフォーラムの主旨説明後、呉地正行さんが水田の生物多様性向上の活動の経緯報告を行い、続いて金井裕さんが新水田目標2030について説明しました。

第1部の事例報告では、3名の方が報告しました。以下が報告の概要です。

■民間稲作研究所 館野廣幸さん「有機稲作農家とみどりの食料システム戦略」:「田んぼに生える草をすきこんで肥料にし、生きもの(生物多様性)特にカエルが支える(力を借りる)有機農業を実施している。雑草に対しても科学的アプローチ(観察して対応を考える)を取り、収量も確保できている。さらにみどりの食料システム戦略については、本来、有機農業は生命によって生命を生み出す農業であり、その本質を捉えそこなっているかのようなこの戦略には問題点が多い。有機稲作農家としては、人と自然が共に生き多くの命を育む農業を展開し続けていきたいと考えている。」

★ 本日のプログラム ★

1. フォーラム趣旨説明 道家哲平(国際自然保護連合日本委員会)
2. 「水田の生物多様性向上の取り組みとその歩み」 呉地正行(ラムネットJ)
3. 「ポスト2020目標と新水田目標2030」 金井裕(ラムネットJ)

第1部 事例報告

1. 「有機稲作農家とみどりの食料システム戦略」 館野廣幸(かえる農場/民間稲作研究所)
2. 「コメを売るからコトを売る」～国民理解へ向けて～ 伊藤秀雄(伊豆沼農産)
3. 「谷津田の自然管理の手法から生物多様性を学ぶ」 手塚幸夫(房総野生生物研究所)

第2部 パネルディスカッション

「みんなが参加できる行動事例を考えよう」

生物多様性国家戦略を考えるフォーラム ONLINE 2022

2030「ネイチャーポジティブ」をめざして
ネイチャーポジティブな農業とは

2022年4月20日(水) 18:00～20:00

参加募集

運営団体:ラムサール・ネットワーク日本
主催:国際自然保護連合日本委員会 共催:日本自然保護協会、ラムサール・ネットワーク日本、Change Our Next Decade、UNDB市民ネットワーク、アースデイ・エプリデー、野生生物保全論研究会 協力:環境省

■伊豆沼農産 伊藤秀雄さん「コメを売るからコトを売る」
 ～国民理解へ向けて～：ラムサール条約湿地である伊豆沼で地元の農産物の生産・加工・販売をしている。ふゆみず田んぼの米作りを始め、自社農場での養豚、果樹栽培の農産物や、伊豆沼のハスを材料にする化粧品の販売なども行っている。農業者を含む地元の人々と地域づくり・人づくりに取り組み、その農村産業として、ふゆみず田んぼの活動そのものへファンディングを首都圏の企業に働きかけて参加する企業を増やし、農村産業を普及させていきたいと考えている」

■房総野生生物研究所 手塚幸夫さん「谷津田の自然管理の手法から生物多様性を学ぶ」：「野生生物の保護管理から有機農業まで 幅広い活動をしている。伝統的な管理をしてきた谷津田の水管理・自然管理は、現在にも十分に通用する優れた技術で、そこでは多様な生態系に多様な生きものが育まれている。谷津にみられるコンクリート水路はかつての水路の形状と類似する点も多く、工法と条件が整えば多様な生物が生息できる事が分かった。いすみ市とともに、環境教育と食育、農業体験を一体的に学ぶシステムを実践しており、伝統的な知識についての学習が大切だと思っている。」

第 2 部 パネルディスカッション「みんなが参加できる行動事例を考えよう」（モデレーター：呉地正行）では以下のような議論がありました。

館野：多くの農家は、イネが育つこと以外（ホタルなどの生きものの存在）は付録的に捉えている。害虫・雑草退治に励む農家の考え方を考える必要がある。

伊藤：農業者にとって生きもの・生物多様性の話は伝わりにくい。導入として農業者が理解しやすい仕組み・話し合いの場所が必要で、国民にとっても同じことが言える。

手塚：「農業を使つてはダメ」ではなく、里山の環境を学びながら「農業を使わなくても大丈夫」というアプローチをとっている。農業は生物多様性に支えられ、生物多様性は農業に支えられるという双方向の考え方を子どもたちに伝えることが大切だと思う。

道家：キーワードは「生きものの力を借りる農法」農業分野の N b S（自然を基盤とした解決策）は生きものの力を借りる農業のことだと思う。生きものの視点を持った人・農家さんを増やしていくという方向性が良いのではないかな。

呉地：日本の「いただきます」には生物多様性の重要性が込められている。生きものに助けられる農業を掘り下げながら、循環する仕組みを考えていきたい。

金井：地域での活動の共有・国内外の枠組み目標との関連性を示し、方向性の議論などもできて良いスタートになった。こういった場での議論が国の施策に活かされるような活動を組み立てるのもラムネット J の役割であり、田んぼ 2030 プロジェクトがプラットフォームの役割を果たしていけるようにしたいと思う。

田んぼのめぐみ いただきました

齋藤 肇

豪雨翌日夕刻、家内が散歩中、我が家の田んぼの排水路近くで小さい魚が波紋を立てていたと夕食時の話題に話す。すると母上曰くそれはどじょうだ！と興奮気味に…、わたしはそれはないであろうと受け流す。食事後、母上は網、バケツ、ザル、ライトを揃え、嫁を従え大排水路へ向かう。肇も来いと私も巻き込まれる。現場到着後母上と嫁で流れに向かってひとすくい。多分キロ単位でどじょうがすくえたのである。驚き!!わたしはマジお袋すげ〜と思う。それは、自然の中で生きている農家が持ち合わせている本能そのもの。土嚢袋で一つ取る。帰ってくる。処理をする、そして風呂に入ろうかと思いきや 肇、まだいぐど〜え、マジ、しかし、うなずきもう一度母上と現場へ向う。すくってみたらザル一つぶん程度すくったか？総計 13 キロの田んぼの収穫。翌日、N P O 田んぼの船橋さんに手伝っていただきゴミ

をより分けこまめにどじょうを洗う。私達の祖父の代は当たり前の事であったどじょう取り。わたしはわからなかった、ただそれを見て暮らしてきた母上の古の勘の鋭さに驚かされる。人生で初めてどじょうでお腹を満たした。ただただ感服でございます。

"めぐみ"の背景

N P O 法人田んぼ 船橋玲

2022 年 7 月 15 日からの記録的な豪雨によって、宮城県の大崎地域でも堤防決壊や橋の流失、がけ崩れなど、各所で被害がありました。一方で、雨が去って落ち着きを取り戻すと、人々の会話に興味深い内容が見られま



した。「兩大丈夫だった？」は当然として、「誰かどじょう取った？」がありました。かつては台風のとどじょうを取って食べることが楽しみの一つであったことの現れで、地域の食文化の一つと言えるでしょう。

各地で減少が続いているドジョウですが、齋藤さんが営む4haほどの田んぼは生きものを育む農法に取り組んでおり、今

日も多くのめぐみが得られました。農家に取り組む農法の工夫のほか、水路と田んぼをつなぐ水田魚道の設置もドジョウを始めとした魚やカエルの保護につながりますので、各地で取られることを期待しています。

※齋藤さんの田んぼで10kg以上の漁獲があったら、軽トラに大漁旗を立てて走りたい！旗のデザインなどアイデア募集中です。

むかい＊いきもの研究所の活動

向井 康夫

むかい＊いきもの研究所は、生き物観察会や、生き物調査、ものづくり体験などを活動を通して、身近な自然のことを、楽しく学んでいただく活動をしています。『お庭』『草原』『畑』『田んぼ』『用水路』『池』『林』など、身近な自然の中で、一緒に生きものに触れ、観察し、いろんな魅力を発見しながら、参加者と一緒に自然のことをより深く学んでいくことを目標として、虫や鳥、カエル、プランクトン、土の中の小さな生きものなどを対象とした『生き物観察会』や、身近な植物の押し花を素材にした『ものづくりワークショップ』を、年間80回程度実施しています

自然体験イベントでは、参加者が主体的に生きものを観察し、観察した特徴に基づき生き物の種名を調べるプロセスを大切にしています。スタッフが生き物の種名を直接伝えることは極力避け、その代わりに、観察の仕方や観察ポイントをお伝えするようにしています。このために、未就学児でも容易に使える観察ツールの開発や既存のツールを使った観察手法の工夫、対話形式で生き物の特徴をたどっていけば種名に行き着く、オリジナルの検索表の作成などを行っています。観察ツールは、観察の精度を最優先しつつ、可能な限り扱いやすくして、観察の際に参加者に余計な負担をかけないことを心がけています。また、資料についても、観察会を行う場所で見られる生き物に合わせて作成し、種同定に有用かつ観察のしやすい特徴を選んで、全てひらがな表記、一般用語のみを使用することで、未就学児から小学低学年の方でも無理なく使えるよう配慮しています。この資料は専門家が種同定に使う検索表と同様の構造を持つ

ているため、より詳細に研究を行いたい場合に、違和感なく専門的な資料へ移行してもらえたいことを想定しています。検索表だけでなく、生き物を見分ける紙芝居も併用しながら、種同定を楽しんでいただいています。イベントでは、楽しく、相互にコミュニケーションを取り、レベルを下げずに学びのハードルを下げ、参加者とともに楽しみながら、身近な自然の奥深さを学び合うことを目指しています。こちらからの一方的な情報伝達でなく、場・状況・感覚・感動を共有しながら、一緒に一つ一つのハードルを越えていくことを大切にしています。こういう活動を通して、参加者がいずれかの生き物に興味を持ち、自発的に研究を進めて、生き物博士が地域にたくさん育ってくれることを期待しています。

多くの環境問題の根本には、自然に関する体験の機会の減少と、それに伴う自然環境や生き物に対する無関心のために、問題を自分事として捉えにくい、ということがあると感じています。当研究所では、自然体験活動を通して知識を得る場を共有することで、自然は楽しいもの、学びの多いもの、自分にとって大切なものと感じ、環境問題を自分事として捉えていただくことを目指しています。

たんぼでいきものみつけました！
どないいきものかな？

すいめんにいる  ⑧ページへ	
かえる  ①ページへ	さかな  ②ページへ
げんきにおよいでる  ③ページへ	かいっぱい  ⑤ページへ
ちびっこ  ⑥ページへ	うのようによ  ⑦ページへ
みずのそこにいる  ⑩ページへ	



ver.20220910YM

むかい＊いきもの研究所
e-mail: ikimono@mukai-ikimono.com
Web site: https://www.mukai-ikimono.com/



この度、「田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト」のロゴ制作を担当させていただきました菅原暢子と申します。

自然豊かな大崎市で生まれ育っておきながら、私はカエルもクモも大の苦手です。田んぼに囲まれた我が家には、夏になると家の中にもカエルがびよんびよん入ってきていつも大騒ぎしておりました。

そんな私が、ご縁あって田んぼの生物を描くことになりました。アクリル絵の具と色鉛筆を使ってリアルに描くことを得意とする私

のもとへ、呉地さんから大量のカエルや昆虫の写真資料が送られてきて今年の夏は大変なことに。

シュレーゲルアオガエルとの出会いや、お尻のトゲトゲしたヤゴ、アシナガガモを初めて凝視したこと、「カエルの過眼線が…」なんて耳慣れない言葉に戸惑いながら6月から取り組

んできたロゴ制作でしたが、完成する頃にはカエルを見ても悲鳴を上げないくらいにまで成長いたしました。手のひらにのせることができるまで、あと一歩です。

ロゴ制作にご協力下さった関係者の皆様へ、心より感謝申し上げます。

菅原 暢子 (すがわら ようこ) プロフィール

大崎市在住

絵本『ケロッキーとのおおきなあな』の作画を担当。

吉野作造等身大キャラクターパネルデザインや、YOSHINO ORIGINAL COFFEE のパッケージデザインなどを手がける。第9回 ART JAPAN 明日への作家展、JIBART 展、小さな美じゅつの展覧会など出展多数。



水田部会からのお知らせ

田んぼ 2030 プロジェクトミニフォーラム開催について

ラムサール・ネットワーク日本の「田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト」では、新たな「水田目標 2030」を策定しました。多様な地域の田んぼ景観と生物相は、地域の方々の長年の営みに培われてきたものです。田んぼ 2030 プロジェクトはそれを田んぼ文化として位置づけ、プロジェクトの名称にも「文化」を取り入れました。

ミニフォーラムシリーズ第1回目は、8月19日に「田んぼと生物文化多様性」—なぜ生物多様性が文化の多様性を守るのか—と題し、國學院大学客員教授の古沢広祐さんに話題提供していただき、水田目標での取り上げ方、進め方などを参加

者と意見交換しました。

第2回は10月14日(金) 18:00~19:40「魚のゆりかご水田をはじめとする琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業」を開催します。青田朋恵さん(「ここ滋賀」所長)に話題提供していただいた後、「自然の恵み(≒食べ物など)を未来に伝えよう」というテーマで、参加者のみなさんとの意見交換を行います。HPやMLで案内し、報告もHP・田んぼだよりで掲載していく予定です。第3回目は来年早々の開催となります。皆様のご参加をお待ちしています。なお、フォーラムは全てオンラインで開催する予定です。

編集後記

安藤よしの

11月5日から開催される第14回ラムサール条約締約国会議の準備に追われています。中国の武漢で開催予定だったのですが、スイスのジュネーブへと変更になりました。武漢ならば、雲南省の棚田見学もありかと期待したこともありますが、残念です。それもこれもコロナのせい、社会的構造に問題あり、つまりもとはといえば私たち自身が悪いのですが。ラムネットJでは、環境省主催の水田関係のイベントで発表を予定しています。日本の良い事例を世界に拡げたいと思っています。



田んぼ 2030 プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。

このニュースレターは、2022年度 地球環境基金の助成を受けて作成しました。



連絡先/事務局

ラムサール・ネットワーク日本
info@ramnet-j.org
FAX: 03-3834-6566